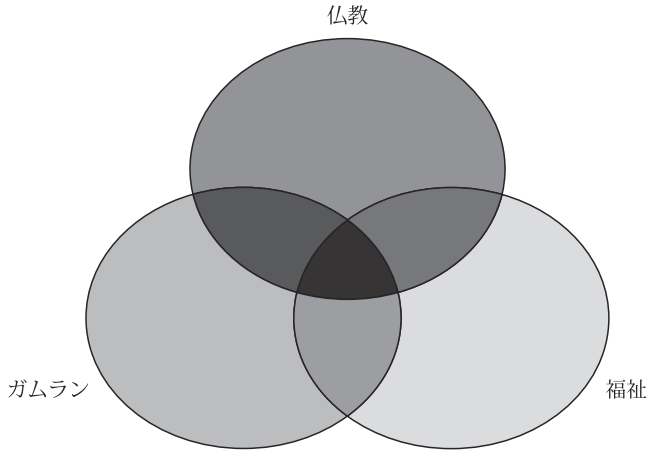
筑紫女学園大学アジア文化学科・人間福祉学科開設10周年記念特別公演

音楽によるともいきの可能性

Living together in music

アジア文化学科４年　城　　聡　美

2008年11月29日、筑紫女学園大学にガムランの音色が響きました。アジア文化学科・人間福祉学科の両学科の開設10周年を記念して開催されたこのシンポジウムは、「アジア」と「福祉」をつなぐということをテーマにしています。この「ともいき」という言葉は、福祉の世界でしばしば使われる「共生（きょうせい）」、仏教思想の中で古くから使われてきた「共生（ともいき）」というふたつの言葉に由来しています。



仏教の「縁起」の思想は生きるものが無関係ではなく、大きな輪の中でともに生きているというものです。また、福祉的思想「ノーマライゼーション」は障がい者と健常者は本来区別されるものではなく社会生活を共にするのが正しい姿であるという考え方です。ガムランはインドネシアの青銅の楽器の合奏音楽です。全ての楽器が役割を果たしながら相互に生かしあって奏でる形態であり、小さな「ともいき」の社会を見ることできます。

私は障がいを持つ子どもたちと一緒にガムランを演奏する、大学卒業生を中心としたグループ Sahaja（さはじゃ）と、学生を中心としたシンポジウムの実行委員会に参加しました。その中でもとくに、アジア文化学科と人間福祉学科の学生で結成された「ともいき実行委員会」では、舞台設営・音響・パンフレット作り・休憩時間の喫茶担当・託児ブースの運営といった、大学の講義では習わないような非常に「実務的な」ことを全ての学生が経験したと思います。この実行委員会では、アジア文化

パンフレットの表紙

学科・人間福祉学科それぞれの学生の特性を生かしながら役割を分担し、準備を進めていきました。「委員会」という仕組みは、大学で言うところの講義や実習というものとは違いますし、中学や高校で習ってきたいわゆる「生徒会」とも一線を画すように感じました。上からの指示・指導というものよりも、「自由に考えて」というスタートは学生にとって真っ白なキャンパスに一筆目の朱を落とすようなものでした。そのなかでも頑張っていたと感じたのは、私よりも１つ学年が下であり、実行委員会の実質的な中心となっていた３年生たちです。私たち４年生が卒業論文に忙しくなっていて、実際の準備が手伝えないときがありました。しかしながら３年生は自ら問題を探し、計画し、ときには大学の中を昼食のパンを片手に走り…そんな一生懸命な姿もしばしば見受けられました。私自身も舞台係を担当していましたが、やはり何回か後輩だけに「よろしくね」とお願いをしたことがあります。「大丈夫です！」と言った後輩を、このシンポジウムや実行委員会のことを私たちが卒業したあと、次の時代に伝えていってくれるのだろうなと頼もしく思いました。手探りではありましたが、仲間同士で協力して、その真っ白なキャンパスに落とされた朱のまわりにきれいな模様を広げていきました。

当日、実行委員会の学生はもちろん一生懸命自らに課せられた役割を果たすため、仲間を助けるため、責任をもって働きました。しかし、働いている中で静かな時間も同時に流れて行きます。ガムランの音色が流れているその空間に居る時間は「何の目的で、ともいき実行委員会が存在するのか」という一番大切なことを知る時間が無かった学生たちにとって、「ともいき」とは何であるかを耳で、肌で感じる時間でした。全ての委員会の学生は仕事の手を止め、あるいは足を止め、またある学生は準備をしながらそっとホール・学校全体に響き渡るガムランの音色に耳を傾けました。

全てのものは共存し、つながり、同じキャンパスに描かれるものです。さまざまな色があり、個性があり、鮮やかに完成していくことでしょう。学生たちは実行委員会というつながりの中で「協力すること」「力を合わせること」「一緒に何かを作り上げること」を教えられることなく、学び取って自分のものにしていきました。そのこともまた、「ともいき」なのではないでしょうか。彼らの中にも得意なこと、苦手なことがあります。その得手不得手を補い合い成功させた「ともいき」は、健常者も障がい者も、大人も子どもも、様々な人たちが暮らしている私たちが目指すべき「ノーマライゼーション」が生かされた社会のひとつの縮図だと思います。実行委員たちの中から、今後は実際にガムランを演奏し、子どもたちと関わっていくことに興味を持つという学生がちらほら出ていると聞きます。

次の10年、そのまた10年、どんな鮮やかな色になっていくのか、楽しみです。

人間福祉学科の学生たちが託児所を運営

ガムランの演奏に参加したいろいろな人たち

なかよしはうすと sahaja の演奏

人間福祉学科とアジア文化学科学生・教員からなる
実行委員会

シンポジウム